

3-2 現代の佐賀平野における人とクリークとの関係

戦後、水道の普及や機械化などの生活様式の変化が急激に進み、生活や農業様式の変化が急激に進むこととなった。佐賀平野の農業においては、クリークからの恩恵を存分に受け、肥料の出現や機械での灌漑・農耕によって大きな発展を遂げることができた。しかし一方では、生活用水路としての機能はなくなり、農作業には効率の悪い、曲がりくねったクリークに対して、クリーク征伐論⁴⁴⁾も唱えられるほどになっていた。また、「泥土揚げ」に代表されるような住民によるクリークの維持管理活動は廃れ、クリークの浚渫問題も顕著になってきた。

3-2-1 生活・農業様式の変化と開発事業

(1) 生活様式の変化

終戦後、全国的に水道の普及や機械化が進み、農業や生活の体系が大きく変化した。佐賀平野も例外ではない。

飲料水は、井戸や水道に代わり、次第に生活用水のクリークへの依存は少なくなった。合成洗剤による水質汚濁もその理由の一つであろう。

家のすぐ側を通るクリークは、整備事業からは免れ、現在でも昔ながらの姿を残している。しかし、生活用水を使わなくなるとそれまで家の一部であったクリークの管理はおろそかになり、生活用水路は荒れる一方である。(図 3-18)



図 3-18 荒廃したクリーク
(佐賀市兵庫町)

(2) 農業様式の変化

戦後、人とクリークの間わりが様々な面で大きく変化した。まず、農業が急速に機械化されたことが挙げられる。大正末期から昭和初期にかけて機械灌漑が進んだが、戦後、農耕作業においても機械化は急速に進んだ。トラクターの出現である。トラクターは急速に普及し、それまでの馬耕に取って代わり、農作業は効率的で個人的な作業になった。また、戦後何年かは、肥料不足によって奨励されていた泥土揚げ作業も、化学肥料の普及とともに衰退していった。このように、それまでクリークや佐賀平野の特徴を反映していた「クリーク農法」は、姿を消すことになる。このような農作業の効率化に加え、農薬の使用、品種改良によって、前述(3-1-1)の「佐賀段階」から停滞の一途をたどっていた佐賀農業は、「新佐賀段階」⁴⁵⁾を迎えることとなった。

(3) 佐賀平野における開発事業

クリークを対象とした開発事業は、昭和 30 年代に始まる。昭和初期に「佐賀段階」という飛躍的發展を遂げた佐賀農業であるが、佐賀平野において、クリークへの用排水問題はいつでも農家の悩みの種であった。クリーク地帯は水源が乏しく、クリークに貯水しておくことでそれを補っていたが、ひとたび大雨が降ると洪水になるという危険性をもっていた。干ばつと洪水がいつでも隣り合わせで、用水・排水の両面において問題を抱えていたのである。また、1966 年の新聞記事⁴⁶⁾で、「つい先日も～中略～お百姓さんが、リヤカーを田に落とし込んでいるのに出会った。～中略～『こがんこつはしょっちゅうばんだ。佐賀は田ん中の道の狭かもんあたあ。(こんなことはしょっちゅうですよ。佐賀は田んぼの道が狭いからねえ。)]』と言いながら～以下略～」とあるように、農業の機械化が進につれて、網の目のようにクリークが分布し、耕地や農道が狭いことによって機械を動かす際の障害となるという問題が顕著になっていった。

その問題を解決するために、水資源開発が計画された。まず、筑後川水系における水資源開発として、福岡・佐賀・熊本・大分の 4 県にまたがる筑後川水系開発がおこなわれた。これは、筑後川の水を有効利用しようという計画で、広い範囲に筑後川の水を分配しようとするものである。同時に、そのために必要な幹線水路の建設のため、「国営土地改良事業」と称して、クリークの統廃合と県の圃場整備事業を含めた土地改良事業が昭和 40 年代から実施され、現在でも継続中である。この事業と、その後の嘉瀬川ダム・北山ダムの建設によって、佐賀平野の農家は、効率的に機械を使うことができ、いつでも一定の水を得ることができるようになった。その反面、古来から続いていた佐賀平野独特の景観は失われ、200 年以上続いた水系水利のしくみは途絶えることになった。



図 3-19 土地改良前のクリーク地帯の空中写真
(佐賀県農林部提供)



図 3-20 土地改良後のクリーク地帯の空中写真
(佐賀県農林部提供)



図 3-21 整備前のクリーク(佐賀市兵庫町)



図 3-22 整備後のクリーク(佐賀市兵庫町)

3-2-2 現在のクリークの管理方法

(1) 行政、土地改良区による管理

戦前におけるクリークの管理は、公有水面でありながらも、水田の持ち主が担当しており⁴⁷⁾、泥土の所有もその人であった。しかし、土地改良に伴うクリークの統廃合後は、個人が管理するということとはなくなり、実質的な公有水面となった。また、土地改良に伴って設立された土地改良区によって、水位調節などの管理をおこない、クリークからそれぞれの田へ引水する作業は個人で行われている。また、戦前は恒例の行事としておこなっていた、住民の共同管理が消滅したことで、県や市町村は、泥土の浚渫問題に頭を抱えている。

(2) 住民による管理

とはいえ、住民による管理が、現在でも行われているところもある。千代田町嘉納やその周辺の集落では、現在でも生活用水路を利用しており、毎年春に樋門の修繕を行い、清掃活動をしているそうだ。この話をお聞きしたKさんは、「昔からのことですから。しかし、移入者の多い地区では、『なぜ私たちがやらなければならないのか』という意見も多いらしくて、自治会長さんが困っていらした。(要約)」ということで、共同管理のために集落内のつながりは欠かせないようだ。しかし、近年では、クリークの汚染の悪化と環境問題への意識の高まりに伴い、住民らによる清掃活動を積極的に行なう地域は増えつつある。(図 3-23)

また、集落共同での泥土揚げ作業を実施したり、または復活させた地域もある。千代田町余江、佐賀市北川副町下武地区などであるが、どちらもいまだに集落内でのつながりが強い地域である。



図 3-23 千代田町における清掃活動の風景
(1999年千代田町町勢要綱 p.17)

3-2-3 現在のクリークの利用について

1) 農業用水路としての利用

現在のクリークは、主に農業のための用排水路として利用されている。戦前は多様な目的で利用されていたクリークであるが、農業のための農地整備とクリークの統廃合がおこなわれ、広くて深いという、人が近づけないものとなってしまった。

2) 地域の水環境としてのクリークの新たな活用

現在、佐賀平野のクリークは、汚染が問題となっている一方、生物の宝庫として有名であり、淡水魚やアウトドア関係の雑誌に取り上げられるようになった。そのため、釣目的の来訪者が県外からも多い。

また、地域の特色を生かしたイベントの場としても注目されている。

千代田町は、佐賀平野のなかでも、菱が取れることで有名⁴⁸⁾、秋になると、女性達がハンギーに乗って採取する風景が今でもみられる。また、とれた菱の実は、全国向けの「ゆうパック事業」を行ったり、町内の学校で給食に取りいれるなどしている。このハンギーを使って水に親しもうというのが、川やクリークをハンギーに乗って競漕する「堀デーちよだ」というイベントである(図3-24)。また、同町では、春と秋にフナ釣り大会(図3-25)がおこなわれている。



図3-24 「堀デーちよだ」(2000年)におけるハンギー競漕風景

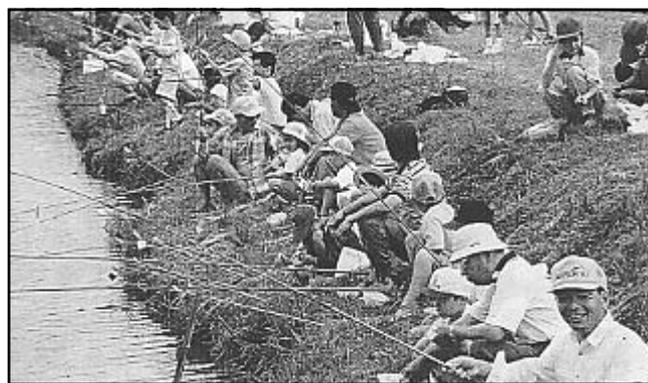


図3-25 「親子ふなつり教室」(1998年)の風景
(広報ちよだ1998年6月号より抜粋)

その他、「堀干し」や「泥土揚げ」を用いたイベントが、芦刈町や久保田町、兵庫町などでおこなわれている。

3-2-4 現代における人とクレークとの関係のまとめ

現代においては、クレークの統廃合や圃場整備により、農業における用・排水路としての役割が主であるが、イベントの場としての利用が盛んになってきたことがわかった。

以下に現代の関わりについてまとめる。

農業用水路の利用による関係

イベントの場としての利用による関係

これらの関係にみられるように、現代では農業での利用といった一元的な関係になっている。しかし、一方ではイベントの場としての利用という新たな利用も発生している。

3-3 本章のまとめ

本章では、現代における人とクレークとの関係を戦前との比較を交えながら述べた。戦前においては農業や生活における利用や管理や祭りなどの慣習によって、人とクレークは多元的で重層的な関係を持っていた。現代では、クレークの統廃合や圃場整備により、農業における用・排水路としての役割が主であり、戦前と比較すると一元的な関係になっている。また、イベントの場としての利用が盛んになってきたことがわかった。

脚注

- 1) 2) 佐賀平野において、大正時代後期から昭和初期にかけて、電気灌漑と品種改良によって米の収穫量が飛躍的に伸び、1935年前後には、反当り収量が全国一となった。この時期を「佐賀段階」と称し、この発展を遂げたクリーク地帯の農業をこう呼んだ。
- 3) 佐賀県農業史，p.114，佐賀県（1967）
- 4) 昭和35年4月1日フクニチ新聞
- 5) 佐賀県農業史，p.115，佐賀県（1967）
- 6) 市場直次郎：日本の民俗 佐賀，p.45，第一法規出版株式会社（1972）
- 7) 佐賀県農業史，p.115，佐賀県（1967）
- 8) 佐賀県史第3巻，p.282，佐賀県（1978）
- 9) 10) 知られざるふるさとの自然史，p.7，佐賀県立博物館（1995）
- 11) 佐賀県農業史，pp.116 - 120，佐賀県（1967）
- 12) 佐賀県農業史，pp.121 - 122，佐賀県（1967）
- 13) 佐賀市北川副町下武 Sさんより。
- 14) 内田萬二：堀（14），新郷土（1954）
- 15) 知られざるふるさとの自然史，p.7，佐賀県立博物館（1995）
- 16) 江口辰五郎：佐賀平野の水と土，p.150，新評社（1977）
- 17) 内田萬二：堀（8），新郷土（1953）
- 18) 神崎郡千代田町嘉納 Kさんより。
- 19) 佐賀県史第3巻，p.278，佐賀県（1978）
- 20) 神崎郡千代田町嘉納 Kさんより。
- 21) 内田萬二：堀（12），新郷土（1954）
- 22) 神崎郡千代田町嘉納 Kさんより。
- 23) 佐賀県史第3巻，p.278，佐賀県（1978）
- 24) 千代田町嘉納 Kさんより。
- 25) (株)フジコンサルタント O氏のお話より。
- 26) 聞き書 佐賀の食事，p.52，農山漁村文化協会（1991）
- 27) 佐賀市兵庫町下淵 Iさんより
- 28) ふるさと佐賀の自然，佐賀県教育委員会（1997）
- 29) 聞き書 佐賀の食事，p.37，農山漁村文化協会（1991）
右上：ふなのかけかい、左上：ふなのこぐい、右下：お酒、中下：こいこく、左下：せっかん
- 30) ヌクメという名前の由来は、冬の冷たいクリークの中でも、深みを作っているヌクメは温かいことからこのように呼ばれたという（兵庫町大字淵 Iさんより）。

- 3 1) 3 2) 3 3) 内田萬二：堀（1），新郷土（1953）
- 3 4) 1960年4月7日フクニチ新聞
- 3 5) 佐賀弁で「菱売りますよ」という意味。
- 3 6) 内田萬二：堀（10），新郷土（1953）
- 3 7) 内田萬二：堀（8），新郷土（1953）
- 3 8) 佐賀市北川副町下武 S さんより。
- 3 9) 神崎郡千代田町嘉納 K さんより
- 4 0) 「ひゃーらんさん」とは、佐賀弁で「入らないように」という言葉で、川や堀に入っ
ておぼれないようにという願いが込められている。
- 4 1) 純真女子短期大学国文科編：九州の河童，pp.74 - 94，葦書房
- 4 2) 神崎町史，p.1124，神崎町（1972）
- 4 3) 佐賀市兵庫町大字淵 F さんより。
- 4 4) クリークがあることによって、「地下水が高いく稲が根腐れしやすい・圃場整備がす
ずまず機械化できない（1988年6月27日西日本新聞より抜粋）」というクリーク農
業の弊害が、盛んに論じられるようになった。
- 4 5) 昭和 41 年 42 年と続いて再び米作日本一になった。品種改良、化学肥料・農薬・機
械の導入、そして個別小農的集約技術による。
- 4 6) 西日本新聞，1966.6.19 より抜粋。
- 4 7) 内田萬二：堀（8），新郷土，10，1953
「元来堀の管理は、古くからの習慣上、堀の近くの水田の主がこれに当たっていて、
東西に走る堀では、その北側に位する田の主がそれに接する南部の堀を管理し、南
北に走る堀では、その東側の田の主がその管理に当たっている場合が多い」とある。
- 4 8) 現在のクリークでは、ホテイアオイが繁殖しており、菱などの他の水生植物が少な
くなっている。

-
- 44) クリークがあることによって、「地下水が高く稲が根腐れしやすい・圃場整備がすすまず機械化できない(1988年6月27日西日本新聞より抜粋)」というクリーク農業の弊害が、盛んに論じられるようになった。
- 45) 昭和41年42年と続いて再び米作日本一になった。品種改良、化学肥料・農薬・機械の導入、そして個別小農的集約技術による。
- 46) 西日本新聞, 1966.6.19 より抜粋。
- 47) 内田萬二：堀(8), 新郷土, 10, 1953
「元来堀の管理は、古くからの習慣上、堀の近くの水田の主がこれに当たっていて、東西に走る堀では、その北側に位する田の主がそれに接する南部の堀を管理し、南北に走る堀では、その東側の田の主がその管理に当たっている場合が多い」とある。
- 48) 現在のクリークでは、ホテイアオイが繁殖しており、菱などの他の水生植物が少なくなっている。